

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 26 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2011

課題番号：19730129

研究課題名（和文） 地域統合体の拡大をめぐる言説・認識・政策：トルコの欧州連合加盟問題を事例として

研究課題名（英文） Discourses, Norms and Policies of EU Enlargement: The Case for Turkey's accession

研究代表者

東野 篤子（HIGASHINO ATSUKO）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60405488

研究成果の概要（和文）：本研究では、トルコの EU 加盟をめぐる EU 内部のディスコースと規範の変遷および EU 内部での政策決定過程を分析した。とりわけ、（1）EU がトルコを「加盟候補国認定」した 1999 年以降、（2）トルコとの加盟交渉を開始した 2005 年を経て、（3）実質的な加盟交渉の凍結に至った 2006 年および（4）それ以降の時期に焦点を当て、理論（おもにコンストラクティヴィズムおよび言説分析の枠組みを使用）と実証の両面から分析を実施した。この補助金を活用し、雑誌論文 3 本（うち 1 本は査読つき）、研究書に掲載された論文 4 本、国内外での学会報告論文 9 本を世に問うことができた。深く感謝申し上げます。

研究成果の概要（英文）：This study surveyed developments of discourses/norms within the EU on EU's enlargement policy vis-à-vis Turkey. In particular, I focused on several important stages within the process, notably (1) the EU admitted Turkey's 'candidacy' to the EU (1999-), (2) the EU started accession negotiations with Turkey (2005-), (3) the EU partially froze accession negotiations with the country (2006-), as well as (4) some important developments in terms of EU's discourses and norms concerning this issue after such deadlock, by using theoretical frameworks of constructivism and discourse analysis. Thanks to this grant, I was able to write 3 journal articles (1 refereed), 4 chapters in 3 edited volumes, and to present 9 papers at international academic conferences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	0	0	0
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
総 計	3,100,000	660,000	3,760,000

（2008 年度は育児休暇のため研究を 1 年間中断）

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：国際統合論、ヨーロッパ、EU、拡大

## 1. 研究開始当初の背景

本課題応募時（2006 年秋）、EU とトルコの加盟問題は大きな緊張を孕んでいた。本課題応募直前の時期、（EU 加盟候補国）トルコが

（すでに 2004 年に EU に加盟していた）キプロスを国家承認せず、トルコと EU との間で関税同盟を創出することをうたったアンカラ協定付属議定書の規定に反して、同協定をキプロスに対して適用しないという姿勢

を示していたからである。EU の一部加盟国はこれに対し、2005 年 10 月以降開始されていたトルコの EU 加盟交渉を締結すべきと主張していた。このような背景のもと、トルコと EU の関係に関する関心は、EU のみならず、わが国でも極めて高くなっていた。本課題採択時、EU はトルコとの加盟交渉を一部凍結しており（2006 年 12 月）、その後の EU トルコ関係の改善をどのようにおこなっていくべきなのかについては、極めて大きな関心を集めていた。

研究開始当時、EU/トルコ関係・あるいはトルコの EU 加盟プロセスを国際関係論の観点から分析していた研究は、日本ではまだ数が少なかった。日本における同分野の研究では、EU 加盟準備の進展によってトルコの政治・経済体制がいかに変化しうるかという国内情勢分析が主流であった。あるいは、EU・トルコ関係に関する様々な問題を「ヨーロッパ 対 イスラム」という、宗教的対立軸のなかから社会的に理解しようとする研究も目立っていた。しかし、とりわけ近年（とくに本研究が主な対象としている 1999 年以降）の EU とトルコとの関係は、単なる宗教問題を超え、EU の機構的一体性や意思決定プロセスの変革などといった地域的統合体のあり方そのものに関する問題や、さらにトルコの加盟プロセスに先立っていた中・東欧諸国の大量加盟による「拡大疲れ」、さらにヨーロッパとアラブ諸国との間の急激な関係再構築など、国際政治的観点からの理解が不可欠となっていた。本研究課題への応募は、こうした従来の EU・トルコ関係研究の不足点を補うことが大きな動機の一つとなっていた。

## 2. 研究の目的

本研究では、トルコの EU 加盟問題をめぐる EU 内部（加盟国政府および EU 諸機構の政治指導者）のディスコースと認識の変遷および EU 内部での政策決定過程（欧州委員会に得おる対トルコ戦略形成過程、理事会などの場における意思決定過程）を、国際政治の観点から分析することを目的とした。また、同問題を検討する上で重要な手掛かりとなる諸概念（たとえば、同国の加盟の代替措置として議論されがちな「特権的パートナーシップ」や、EU 側の受け入れ態勢の程度を問う「吸収能力」など）の検討、トルコの加盟問題の進展に直接・間接の影響を与えうる EU 対外政策（当面は EU 拡大の対象とならない諸国との関係強化を目指す「欧州近隣諸国政策」や、西バルカン諸国やアイスランドと EU との加盟交渉など）の動向、マスコミの報道ぶり、など、同問題を取り巻く諸要素についても複合的に検討することを目的と

した。

なお、これまで私は EU の中・東欧諸国に対する拡大（EU の東方拡大、あるいは第 5 次拡大と称されることも多い）を 10 年近く研究していたが、研究の幅を広げるべく、それまでほとんど手をつけていなかったトルコの加盟問題に取り組みたく、本課題に応募したという経緯があった。新たに開始したい研究に若手研究者がチャレンジできる制度がこの「若手」制度であり、個人的には全く新たな領域に踏み込むきっかけを作ってくださったこの助成制度に深く感謝する。

## 3. 研究の方法

理論的には、コンストラクティヴィズムおよび言説分析の手法を組み合わせつつ、EU のトルコに対する様々な規範と認識が、各段階での決定（あるいは非決定）にどのように影響を与えたのかについて検討していった。この理論的枠組みの構築と、EU の対トルコ言説のマッピングを中心とした実証研究との組み合わせで研究を実施した。資料的には、欧州連合理事会、欧州理事会、欧州委員会、欧州議会等、EU の諸機構から出された公式・非公式資料、EU の諸機構や EU 加盟国の政治エリートのスピーチトランスクリプトや各種寄稿等を中心に分析した。また、EU のセミオフィシャル新聞である Agence Europe の記事や、加盟各国のクオリティ・ペーパーの記事を使用した。

## 4. 研究成果

最初の 2 年間は理論枠組みの構築と整理、最後の 2 年間は実証研究の積み上げに、それぞれ集中した。論文の執筆にも力を注いだが、それ以上に、国内外の主要な学会で研究報告を行い、可能な限りフィードバックを受けることをまずは重視した。コンストラクティヴィズムやディスコース分析などといった分析枠組みは、日本ではまだ多数派とは言えず、反対に欧米では非常に影響力が強い。このため、自らの構築した枠組みが、日本と欧米とでどのように受け取られるのかを、学会報告でいただけるコメントを通じて直接理解したいという気持ちが強かった。幸い、これまでのところ、日本と米欧の双方で、非常に好意的なフィードバックを得ることができ、今後このテーマに向けて著書を完成させて行くにあたり、非常に有意義であった。具体的な研究成果は以下 5. に記載している。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 東野篤子「ウクライナのEU・NATO加盟問題」(『法学研究』第84巻第1号)、2011年、339-378。査読なし。
- ② 東野篤子「ヨーロッパ統合研究への『安全保障研究のコペンハーゲン学派』の適用をめぐる一考察 EU拡大を事例として」(『法学研究』第82巻第5号)、2009年、47-77頁。単著。査読付。
- ③ 東野篤子「EUの対グルジア政策 1990年代からグルジア紛争まで」(『ロシア・ユーラシア経済』第920号)、31-43頁、2009年。査読なし。

〔学会発表〕(計9件)

- ① 東野篤子「イースタン・パートナーシップ(EaP)対象諸国に対するEUの危機管理」、国際安全保障学会研究大会、分科会II-②、2011年12月11日、拓殖大学。
- ② 東野篤子「西側としてのトルコ」言説とEU加盟問題」、日本国際政治学会2011年度研究大会分科会国際統合II、2011年11月12日、つくば国際会議場。
- ③ Atsuko Higashino, 'The limits of normative approach? The case for Turkey', European Union Studies Association Biannual Conference, 2011年3月5日, Hyatt Regency Boston, USA。
- ④ 東野篤子「ヨーロッパ統合の理論とEU拡大の現段階」、EUSI 早稲田講演会(招待講演)、2010年12月14日、早稲田大学。
- ⑤ 東野篤子「EU拡大の現段階——2010年欧州委員会の『拡大戦略』を中心に」、慶應EU研究会、2010年12月4日、慶應義塾大学。
- ⑥ 東野篤子「規範的拡大の終焉? トルコ

のEU加盟問題をめぐる規範的アプローチの再検討」日本国際政治学会2010年度研究大会分科会A-2 欧州国際政治史・欧州研究I、2010年10月29日、札幌コンベンションセンター。

- ⑦ Atsuko Higashino, 'War on Georgia and the EU', European Union Studies Association Biannual Conference, Los Angeles, USA, 2009年4月23日。
- ⑧ 東野篤子「EU拡大と対外関係」および「西バルカン、トルコ、近隣諸国政策」(EUインスティテュート・イン・ジャパン(EUIJ)出版記念シンポジウム)、2007年6月9日、国際基督教大学。
- ⑨ Atsuko Higashino, 'The use of sub-regionalism as a policy tool: Between the EU's external policy and enlargement' European Union Studies Association Biannual Conference, Montreal, Canada, 2007年5月18日。

〔図書〕(計5件)

- ① 東野篤子「EUの拡大」森井裕一編『ヨーロッパの政治経済・入門』有斐閣、2012年。237-256頁。
- ② 東野篤子「EUの拡大政策」森井裕一編『ヨーロッパの政治経済・入門』有斐閣、2012年、238-256頁、単著。
- ③ Atsuko Higashino, 'Competent Analyst but Modest Peace-Broker? The EU's Involvement in the 'Frozen Conflict' Problems in Georgia', in Carol Rinnert, Omar Farouk, Yasuhiro Inoue (eds.) *Hiroshima and Peace*, Keisuisha, 2010, 219-229. 単著。
- ④ 東野篤子「規範的パワー」としてのEUをめぐる研究動向についての一考察」森井裕一編『地域統合とグローバル

秩序』信山社、2010 年。69—98 頁。単著。

- ⑤ 東野篤子「第 5 次拡大実現以降の EU 拡大プロセス（2007—2009 年）」森井裕一編『地域統合とグローバル秩序』信山社、2010 年。147—181 頁。

〔その他〕

ホームページ等

（私個人の HP ではないが、本研究課題の成果を掲載してくださった HP として）

<http://www.talkingturkey.com/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

東野 篤子 (HIGASHINO ATSUKO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60405488